



## 太刀 銘 吉信 よしのぶ 【重要文化財】 鎌倉時代（13世紀）

長さ 2尺7寸4分（約83.0cm） 反り 1寸2厘（約3.6cm）

萬治2年(1659)11月、四代将軍 徳川家綱が臨時遷宮齋行にあたり内宮に奉納



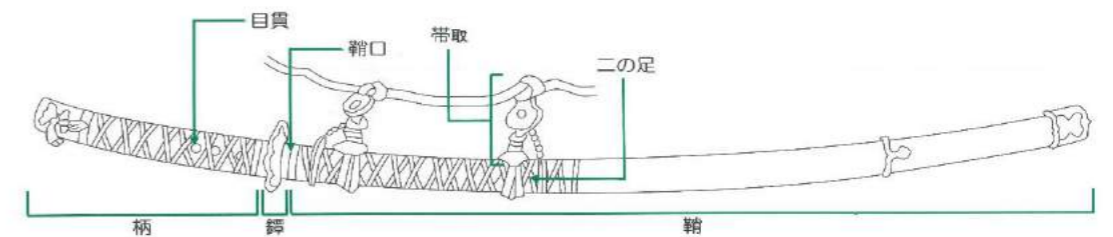
吉信は備前鍛冶で福岡一文字派の刀工。寸法が長いことから、かつては南北朝時代の貞治年間(1362-1367)に活動した備前長船派の吉信とされていた。本資料は反高く、猪首風の短い切先からなる力強い姿、華やかな丁子乱れの出来から、鎌倉時代中～後期（13世紀後半）の福岡一文字派の刀工とされている。

堂々とした製作当初の太刀姿を残し、地刃は明るく冴えて健全である。奉納時に製作された葵散文糸巻太刀拵が附いている。

## 糸巻太刀拵 いとまきたちごしらえ

拵とは柄・鐔・鞘などの刀身を納める装飾一式のことで、特に柄および鞘口から帯取の二の足あたりまでを、平組で編んだ糸で巻いた拵を「糸巻太刀拵」という。

柄の側面につける飾り金物である目貫には、表に「日輪文」が裏に「月輪文」、他の金具には「雲形文」を施している。「伊勢参宮曼荼羅」では天照大神を日輪、豊受大神を月輪で表している。また雲は日月に付す祥瑞の氣象であることから、大神の御神威に添う形象として、五代将軍徳川綱吉以降は、奉納刀の拵に全て雲形文を施している。



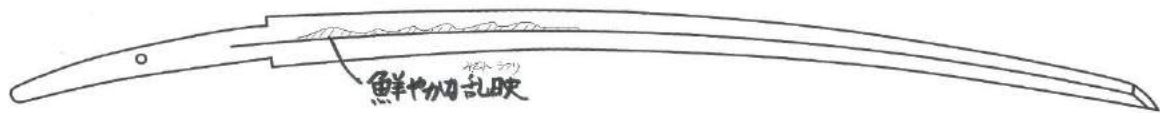
『図解 日本の刀剣』（東京美術 発行）より抜粋



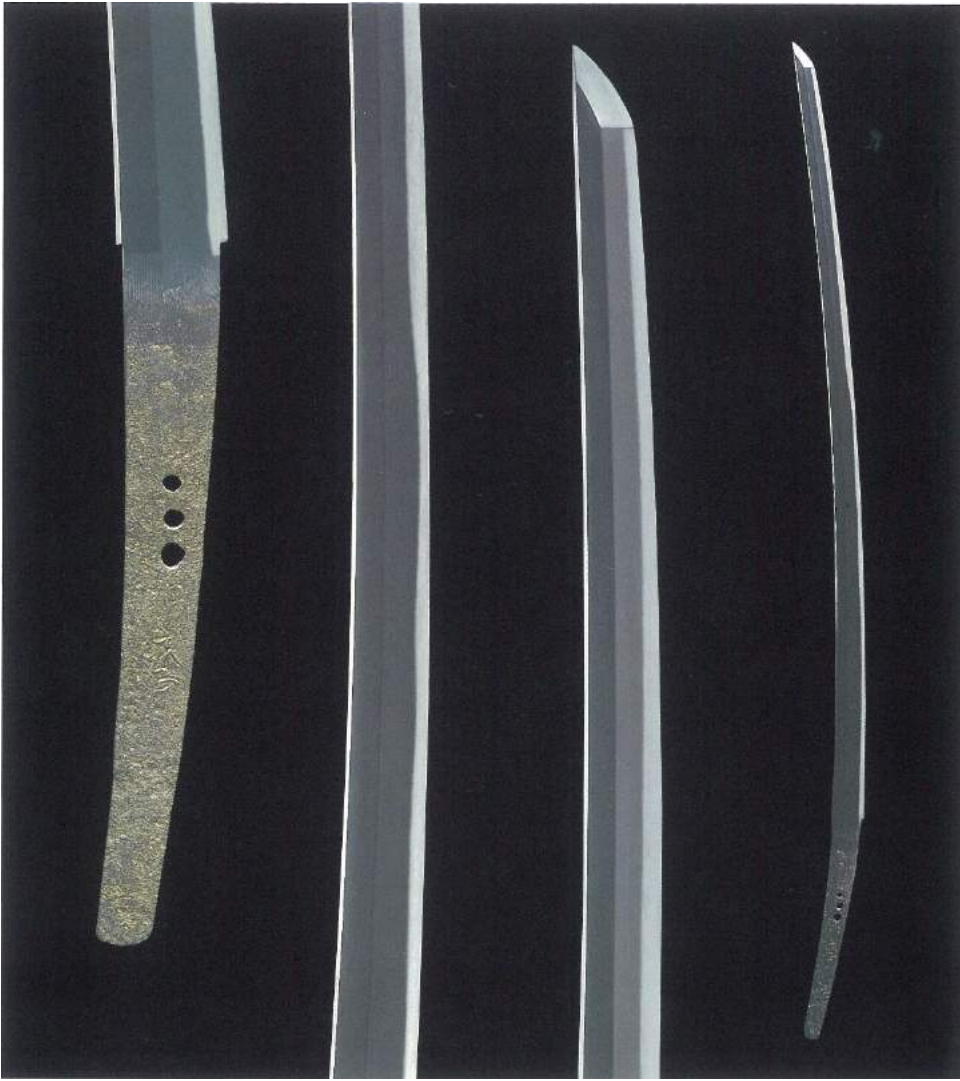
## 太刀 銘 次家 <sup>つくいえ</sup> 【重要文化財】 鎌倉時代（13世紀）

長さ 2尺3寸6分（約71.5 cm） 反り 8分（約2.4 cm）

元禄2年(1689)9月、五代将軍 <sup>つなよし</sup> 徳川綱吉が第46回式年遷宮を奉祝して外宮に奉納



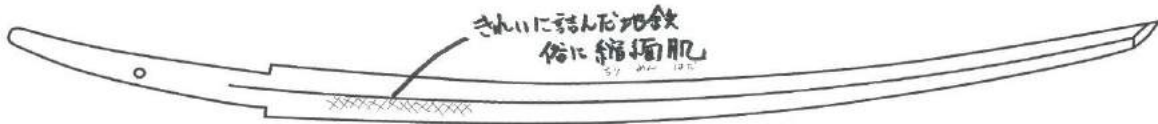
<sup>つくいえ</sup> 次家は備中鍛冶で古青江派の刀工。細身・小鋒 <sup>こきつさき</sup> で反り高く優美な姿に、地刃の出来は古雅であり、茎仕立てや刀工銘を佩裏に切るなど同派の特徴を顕著に示している。後鳥羽上皇（1180-1239）の命により、1か月交替で院に勤番した御番鍛冶の一人である。名工として名高いが、在銘確実な太刀は本御料を含めて2振である。古青江派特徴である佩裏に銘があるため、刃を上向きに展示している。奉納時に製作した雲形文糸巻太刀拵 <sup>うんぎょうもんいとまき た ちごしらえ</sup> が附属する。



とただ 銘 俊忠 【重要文化財】 鎌倉時代（13世紀）

長さ 2尺4寸9分5厘（約 75.6 cm） 反り 7分5厘（約 2.3 cm）

宝永7年(1710)4月、六代将軍 徳川家宣が前年の将軍就任の奉告のため内宮に奉納



とただ びっちょう かし こあおえ  
 俊忠は備中鍛冶で古青江派の刀工。本資料は「俊忠」銘で唯一現存する作例である。詳細は古伝でも明らかにしないが、におい 匂出来で ちゅうすくは 中直刃に小乱れと互の目が交じる刃文、きれいに詰んだ地鉄にわずかに現れた すみはだ 澄肌、茎に施された おおすじか やすりめ 大筋違いの鑢目などは古青江派の特徴である。迫力と優美さを兼ね備えた同時代の健全な太刀姿を今に遺した優品である。奉納時に製作した うんぎょうもんいとまきた ちこしらえ 雲形文系巻太刀拵が附属する。

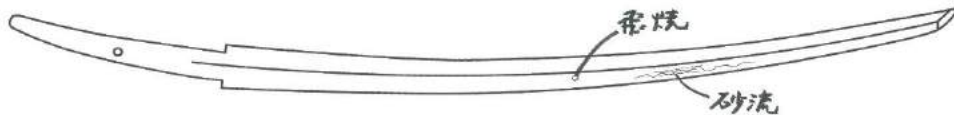


太刀 銘「和泉守来金道」(靈元天皇奉納刀)

## 太刀 (菊花文) 銘 和泉守来金道

長さ 2尺3寸6分 (約 71.5 cm) 反り 7分 (約 2.1 cm)

正徳5年(1715)8月、靈元法皇が宇治橋造替を奉祝して内宮に御奉納



沸出来、のたれ調の互の目の刃文。小板目詰む鍛え肌に切先は中鋒の太刀姿。来金道(「かねみち」「きんどう」とも)は約300年前の山城国(京都府)三品一派の刀工。奉納年は四代の時代であるが、目釘穴を開け直していることから新製作とは考えにくく、菊花文の形状や銘振りは三代の特徴を示している。

三代は二代来泉金道の長男で、延宝から元禄年間に和泉守に任ぜられ、元禄15年(1702)に早世した。

太刀 銘「丹波守吉道」（靈元天皇奉納刀）



## 太刀（菊花文）銘 丹波守吉道

長さ 2尺3寸6分（約 71.5 cm） 反り 7分（約 2.1 cm）

正徳5年（1715）8月、靈元法皇が宇治橋造替を奉祝して外宮に御奉納



小沸出来の直刃が幾筋も重なり、柂目交りごころ板目の鍛え肌。切先は掃きかけて焼詰。

吉道は山城国（京都府）三品一派の刀工。本作は約 300 年前に活躍した五代目。二代の時に朝廷より十六葉の菊花文を切ることを許され、皇室御用鍛冶として名声を得た。作刀では、刃と平行に沸を伴った飛焼が二筋・三筋と続く独特な刃文を焼いた。これを籾刃といい、後代の吉道はこれをさらに誇張して代々の特長とした。



太刀 銘「伊勢守藤原清方」(櫻町天皇奉納刀)

## 太刀 (菊花文) 銘 伊勢守藤原清方

長さ 2尺2寸9分五厘 (約 69.5 cm) 反り 5分 (約 1.5 cm)

寛延2年 (1749) 9月、櫻町上皇が第49回式年遷宮を奉祝して内宮に御奉納



出来の直刃で均口よく締まる刃文に小板目よく詰む鍛え肌。中鋒という太刀姿。

清方は約250年前の薩摩国(鹿児島県)の刀工。一族は同国喜入を鍛刀地とする。薩摩藩主の嫡子島津宗信に随行して出府し、帰途の延享3年(1746)4月に京都で伊勢守を受領した。豪壯で刃中の激しい働が特徴の薩摩新刀であるが、本作は献上品らしい優美な太刀姿をしている。



## 太刀 (菊花文) 銘 伊豆守源鬼道

長さ 2尺2寸9分5厘 (約 69.5 cm) 反り 6分 (約 1.8 cm)

寛延2年(1749)9月、櫻町上皇が第49回式年遷宮を奉祝して外宮に御奉納



小足

刃文は沸出来の直刃、元に足が入る。小板目よく詰む鍛え肌、中鋒でのたれごころに先が尖った「三品帽子」が特徴的。

鬼道は約250年前の三品一派の刀工。日向国(宮崎県)の生まれ。姓は稲葉。六代伊賀守金道に師事し、薩摩藩の支藩である日向国佐土原藩に抱えられた。「伊」の字の旁は通常「尹」であるが、伊賀守金道の一門は「平」に切る特徴があり、師弟関係が伺える。鬼道銘は二代にわたるが本御料は初代の作と見る。